

COVID-19 が投げかける外感病学になげかけるもの

熊本赤十字病院 総合内科
加島雅之

COVID-19 の流行は現代の社会の営みを大きく変えるような影響を与えている。このような COVID-19 に対しても中医学が果たせる役割は、幅が広く、予防・軽症患者への治療、中等症・重症患者への西洋医学との併用療法、回復期の体力改善や後遺症の予防および治療と多岐にわたる。

中医学の歴史は、大規模な感染症に対処し、変化発展してきた歴史といっても過言ではない。『傷寒論』が3世紀ごろに流行した致死性感染症に対処するために作成されたことはつとに有名であるが、『素問』・『靈枢』もその中核理論に“虚風”・“虚邪賊風”といった予後不良の外感病の認識のその対処法が示されている。また、南北朝の『小品方』では大規模流行を示す“天行”に対する新たな治療法が開発されたこと、宋代の『和剂局方』に蘇葉、藿香、羌活などを使用した新たな解表法の方剤の収載、金元四大家とそれに続く明代の医学も熱病に対する分析から医学理論が形成され、明代後期から清代に温病学が形成されていたことから分かるであろう。

こうした中、COVID-19 は中医学の外感病のとらえ方にどのような変化をもたらすのであろうか？この疾病は、初期に悪寒から始まる傷寒でも、初期に高熱と咽頭痛で始まる温病とも異なる。中医学には今は忘れられたもう一つの外感病の治療法がある。軽症の感染症に使用されると考えられてきた香蘇散、参蘇飲、十神湯、人参敗毒湯などの感冒門の方剤である。これらの方剤本来、疫病に対して開発されてきたものであり、まさに COVID-19 の特徴は、これらの方剤の適応の病態と同じ特徴を有している。

感冒門の方剤の方法を応用した COVID-19 の分析と治療の実際を、症例を通じて紹介したい。